

開館10周年記念企画展としての新進作家展
—その役割と課題

中村浩美 (東京都写真美術館 学芸員)

Hiromi NAKAMURA
Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography

開館10周年記念企画展としての新進作家展—その役割と課題

1. 日本の新進作家展の展開と反響

2002年にスタートした現代写真のアンニアル展「日本の新進作家」シリーズの第1回展「風景論」につづく第2、3回展「幸福論」(2003年)「新花論」(2004年)では、現代美術における写真のあり方、あるいは可能性をより強く意識した展覧会が企画された。こうした状況を生み出した背景には、近年の国内外における近代・現代美術館における写真展の活発な展開、そしてもうひとつ、既存のカテゴリーにはあてはまらない写真家・アーティストらの多種多様な活動ぶりがあった。〈新進作家展〉という名の下に、新たな「創造活動の展開の場」を拓くことは、美術館にとっても、また写真家・アーティストたちにとっても、かねてより求めていた〈次なる〉可能性を期待させるものに違いない。そのためには、まず第一歩として出展の対象とする作家の調査範囲を広げる必要があった。実際、「幸福論」展における写真家とアーティストの割合は1対2あり、「新花論」展では1対3である。

出展に応じた写真家・アーティストたちは、当初はある種の戸惑いを見せながらも、不意の顔合わせを楽しみながら、ひとつの企画テーマに向かって作品を選んでいった。そのプロセスにおいて、現代美術と現代写真を区別する必要などまったくなかったと言える。

一方、鑑賞する側である来館者はどんな印象や感想を持ったのだろうか。以下、展示会場の出口調査で得られたアンケート用紙による回答を引用する。

「幸福論」展：

[支持]

- ・空間をこんなに広くとっているのを見たのは久しぶりです。作品を見るのに、すごく気持ちがいい。
- ・幸福というとかく浮き足だってみえるものを、3名の方の作品が淡々としかし情熱をもって表現していたところが良かったと思う。

[不支持]

- ・作品数が少ない。
- ・展示の仕方がよくない。

「新花論」展：

[支持]

- ・花のイメージのとらえ方に特徴があった。
- ・写真という概念の広さを知った。
- ・空間づくりに感心した。

[不支持]

- ・見慣れた花の写真とかけ離れていたの少し戸惑った。
- ・匂いと機械音であまり落ち着かない
- ・もう少し説明(分かりやすく)が欲しかった。

このように、賛否両論はわかるものの、概ね「支持する」意見が多かったようだ。それは、そのまま美術という世界における〈写真〉の多様性、換言すれば曖昧さへの興味を持ちようにも置き換えられるのではないだろうか。開館以降、当館を訪れる来館者像は、当初のマニアックな写真愛好者やカメラ愛好者に代表される「撮る側」の人たちから、徐々にではあるが、しかし確実に、作家なり、他人の作品を「観る側」の人たちへと移り変わってきた。いわば、テクニックの重視から、感情の共有へと新たなベクトルを見出していったのである。こうした来館者像の変容、またそれにとまなうニーズに応えるべく、開館10周年を迎えた当館は、その特別企画展として「日本」という枠組みを大きく「世界」へと広げた新進作家展へと発展させることとなった。

2. 私のいる場所 ゼロ年代の写真論

第4回目となる今回の新進作家展では「私のいる場所」、すなわち「私性」をメインテーマとした。写真を語ろうとするとき、それがもつとも今日的だと考えたからである。また、副題を「ゼロ年代の写真論」としたのは、総合開館から10周年を迎える記念すべき年にこそ〈写真〉を再考しようと考えたからで、「ゼロ年代」とは西暦2000年以降を仮にそう呼んだものである。本展では、以下の3つの点においてそれぞれの〈拡大〉を図るべく企画を練った。

1) 国際性

出展作家の出生地および活動の拠点を「日本」に限定しない。

2) 作家性

出展作品の表現手段および展示方法を「写真」に限定しない。

3) 多様性

出展作家・作品の多様性を最優先する。

その結果、日本および海外で、2000年以降に頭角をあらわしてきた新進作家のうち、ベルギー、フランス、韓国、フィンランド、オランダ、オーストリア、そして日本の7カ国から15作家(グループ)を取り上げ、独自の表現世界を展開する彼らに写真・映像の新たな可能性や価値観を問いかけるということになった。さらに、「私性」というメインテーマを深く読み解くために、以下のサブテーマを設定することとした。

パート1：私のなかの私

パート2：社会のなかの私

パート3：日常への冒険

展示会場においては、3つのサブテーマに即してそれぞれ異なるフロアを使用することにした。それにより出展作家・作品の多様性を最

優先としながらも、フロアごとに一定の統一感を保ち、全体のバランスが図れると考えたからである。

約半年という短い準備期間ながらも、これらのテーマに基づきながら、各作家たちはそれぞれの「写真論」を独自の方法論で探った作品を制作してくれた。彼らの活動範囲はペインティングをはじめパフォーマンスアート、インスタレーションアート、フォトジャーナリズム、コマーシャル（ファッション）など多岐にわたっていたが、一定のテーマを追求すると同時に、「写真」というひとつのメディアあるいは表現手段をいかに作品に用いるかが共通の課題となった。以下に掲げるのは、本展の開催に際して刊行された図録¹⁾ 収載の出品作家によるステイトメントの抜粋であるが、彼ら自身の言葉からは、たとえ共通の課題に取り組む場合でも、そこには多様な制作態度や信念が存在していることが見て取れる。

◆ジャン＝ポール・プロヘス：「私は自分を取り巻く世界を語ることで、自らを語ろうとは思っていない。私にとって、なじみ深く必要なもの、私の人生を撮っているにすぎない。（中略）音楽を聴くように、私の写真を見て欲しい。夢の中でふわふわと漂うように」

◆アンニ・エミリア・レッパラ：「私の写真は、認識という試みによって、あいまいでほんやりとした瞬間の光を目に見えるかたちにするのである。私は継続性をとおして生の瞬間に近づきたい。矛盾するが、それを留めよう、写真に捉えようと、瞬間を抱え込もうとし、護ろうとすると、逃してしまうことは避けられない。これらの矛盾点と、離れていることと、近くにあることの関係性にある境界線を探していくことに、私は興味がある」

◆塩田千春：「父も母も叔父も叔母も生まれる前からみんな親戚だった。あれから何年経ただろう。（中略）私一人が遠くにきてずいぶん変わってしまったように思えたとき、何処へ行っても自分の帰り道がないような気持ちになった時、ふと父と母が生まれたあの土地と親戚の人たちの顔を思い出す」

◆エリナ・プロテルス：「私の作品は大型のカラー写真という現代的な表現方法を用いてはいるが、古典的な形象絵画の美に負うところが大きい。光、色、構成、空間における人物、三次元の二次元への描写など、何世紀にもわたって、画家たちが取り組んできた問題に、私はカメラでアプローチを試みている。これらの問いはあらゆるビジュアルアートの根源を成すものだ」

◆染谷亜里可：「ものは光によってその存在が見えているが、姿が見えているということと、そこに実体があるということは、必ずしも同じことではない。たとえば記憶や想像、夢という頭の中の映像には実体はない。しかし、時間と空間を持ち、時には匂い、音、触覚といったクオリアを伴い現前する」

◆アントワーン・ダガタ：「写真は嘘以外のなにものでもない。空間

は切り取られ、時間は操作される。時間と空間という偽りの中で写真家は偽善か虚構のどちらかを選択することを強いられる。私に興味があるのは写真家が世界をどう見ているかではなく、むしろ写真家と世界との最も親密な世界なのだ。どのように撮るのかは問題ではない。むしろなぜ撮るかなのだ」

◆原 美樹子：「満月の頃、三人目の出産の折のことである。病院の相部屋、向かいの病床に、二十歳そこそこの女の子がいた。聞くと、数日前700gの嬰兒を産み落としたという。(中略) 彼女である部分とそうでない部分を隔てるカーテンという名の境界。布一枚で仕切られた私。私は私の産んだ子とともに、産後6日目で病院を後にした。彼女の嬰兒は、未だ保育器に閉じこめられたままだった」

◆サボー・シャロルタ：「私は団地に26年間住んでいるが、この周りに誰が住んでいるのか知らない。ただ聞こえてくるのは、近隣の雑音である。(中略) ある時から、彼らを監視し続けた。正確にいうと、2週間と3日である。探偵用のカメラをコート胸のあたりに隠した。気づかれずに遭遇者を撮影できる方法である。ある夜、エレベーターの中の電球にカメラを仕掛けた。時には、すべての詳細を素早くメモするためヴォイス・レコーダーも持ち込んだ。これが私のやりかたである」

◆池田晶紀：「これまでの僕の写真家としての作家活動での主なテーマは、〈対「人」というプロセス〉の中で作り上げるものでした。その延長線上から、新しいプランとして生まれてきたイメージが、『休日の写真館』ということになります。(中略) これらの作品は、シチュエーション型の写真表現ではありますが、広告写真やファッション写真といった消費社会における役割としての表現ではなく、見慣れた風景を異化することによって、物事の本質を見抜こうという試みです」

◆姜 愛蘭：「人類の知識に関する歴史を代弁する本というモチーフを通して、デジタル時代を迎えた人間にとっての時間と空間の意味を新たに付与し、新たな文化に対する省察を行うことが、私のデジタルブックプロジェクトの目的である。基本的に本は遊牧民的放浪の始まりであり、持続である。今や人間の経験を互いに結びつけ、神経システムを地球全体に拡張する手段が電子ビットにより可能になり、サイバースペースの出現は、権力の中心要素を抜け出し、境界を自由に出入りする電子的人間がさらに情報と知識を分類・編集しながら、また他の本の文化を作り上げようとしている」

◆ジャクリーヌ・ハシンク：「会社の持ち物であふれる働く環境で、パーソナル・コーヒーカップは労働者それぞれの個性を表す。工場やオフィスにおいて、労働者は自分のコーヒーカップを持ち込み、会社文化はコーヒブレイクを供し、彼らは束の間の私的空間を楽しむことができる。週末や趣味、家族などの話をしたりして。各人の『パーソナル・コーヒーカップ』を撮ることで、私は会社というものを地図にして描きたかった」

◆ニコール・トラン・バ・ヴァン：「写真は、外見、背景や像の設定、偽りの時代、ファッションの理想、既製の服、既成の考えに疑問を呈する脱構築のため、幻影を作り上げた。身体は社会のメタファーとなり、社会は身体のメタファーとなる。(中略) 外見が社会において強力な役目を果たすという事実からは誰も逃れられない。存在することの意義を探求しようとするためには、外見を粉碎し、脱構築のまな板に乗せなければならない。その傷跡を見つめ、そのイメージの中に入り込み、“裸の状態をまとった裸体” というパラドックスを何気なくやり過ごそうと私は試みている」

◆セカンドプラネット：「誰かが見た風景がテキストや写真、映像などに変換・編集され、ほかの誰かに伝わる時、そのイメージはある特定の場所、特定の時間に存在していたものではなくなります。(中略) このプロジェクトは、テキストや写真によって再現された風景をもとに、そこではない『もうひとつの旅』をめぐるささやかな小旅行のようなものです」

◆みうらじゅん：「アイって、実はこの世の中に満ち溢れているんだ。問題なのはこのアイをキャッチできる自分でいられるか、どうかなんだ。カメラを持って毎日いたよ。いつでもどこでも、何十年も。いい写真が撮りたかったわけじゃないんだ。見つけたアイが、どれほど素敵かって、紹介したかったんだ」

◆ロモグラフィー：「眺めて楽しむのもいいけど、自分でカメラを手にしてみるのはもっといい。その海の向こうにはきっと果てしない写真の空がひらけてくる」

次に、こうした出品作家による様々なプレゼンテーションに対する鑑賞者の反応を探るため、来館者の協力で得られたアンケートの集計結果を掲載しておく。

1. 告知の効果

もっとも多かった回答は、「知人友人に聞いて」(25%)、ついで「その他」(24%)「当館のポスター、ニュース、チラシを見て雑誌記事を見て」(23%)の順。

2. 地域性

関東圏を中心とした「その他」が約半数の48%を占め、ついで「都内」が45%とつづく。

3. 性別および年齢

女性56%と、男性36%。20代が圧倒数を占める。

4. 職業

学生が37%を占め、会社員28%、自由業9%へとつづく。

5. 来館頻度

初回が45%、「2～5回」が27%を占め、常連客を大きく上回った。

6. 来館人数

1人が49%を占め、ついで2人の56%、3、4人以上がつづく。

7. 来館形態

「友人」が過半数の51%ともっとも多く、「恋人」「夫婦」へとつづく。

8. 展覧会の感想

「良かった」が77%、「普通」が17%、「あまり良くない」「良くない」が3%。

9. 自由意見によるコメント

[支持]

- ・写真だけではなく、本人の写真に対する考え、哲学を解説していたところがよかった。
- ・世界の若い作家の感性を久々に感じて気持ち良かった。
- ・コンセプトが身近で、でも考えることからつい逃げてしまうような題材だったので、改めて向き合うことができて良かった。
- ・こういうのも「写真」と呼ぶのか、こういう風に撮ってもいいんだ、と見識が広がった。とても嬉しい。
- ・欧米の作家とアジアの作家とのスタンスの違いを強く感じた。
- ・自分の中にあった写真の概念が変わった。

[不支持]

- ・難解だった。
- ・写真の枠の定義は難しい。
- ・みうらじゅんを持ってくるのは東京都の美術館としてどうかと思う。
- ・あまりにパーソナルな写真はおもしろくない。
- ・作家それぞれのテーマが深い分、少し難しかったように思う。

10. 各作家への感想

ジャン＝ポール・プロヘス：「写真への愛情が感じられた」

アンニ・エミリア・レッパラ：「どの写真を見ても不思議な気分になった」

塩田千春：「よく血の繋がりを集めたなと感心した」

エリナ・プロテルス：「エリナ・プロテルスの作品は鋭さの極みと言える」

染谷亜里可：回答なし

アントワーン・ダガタ：「官能と本能の感覚は似ていると思った」

原美樹子：回答なし

サボー・シャロルタ：「イラストとの配置がとてもおもしろく、説明もよくわかった」

池田晶紀：「優しさと愛を感じ、感動した」

姜愛蘭：「映像と一緒に音楽を聞くというのが斬新でよかった」

ジャクリーヌ・ハシンク：「テキストがとても効果的だった」

ニコール・トラン・バ・ヴァン：「衝撃を受けた。裸の意義、興味深い」

セカンドプラネット：「無名性の乾いた悲しみがあるのにおもしろかった」



『朝日新聞』2006年4月6日²⁾



『産経新聞』2006年4月20日³⁾



『relax』2006年3月号⁴⁾

みうらじゅん:「みうらじゅんの視点がおもしろく、純粋に楽しめた。写真美術館で見ることができて嬉しい」

ロモグラフィー:「ロモグラフィーの活動を知って新鮮な印象を持った」

11. 今後希望する展覧会

今回のような新進作家のいる写真展

世界で活躍する日本人作家

今日性のあるテーマ

作家、学芸員の意図が表現されたもの

実力のある若手作家の作品

あらゆる写真の定義の枠を取り払ったもの

12. 美術館への要望

ワークショップやアーティスト・トークの数を増やして欲しい

ディスカッションの場が欲しい

3. 〈国際性〉とその課題

本展の試みを3つの観点から整理してみよう。最初に、作家性についてはどうだったか。〈新進作家〉を取り上げる際の課題として、必ずしも知名度の高い作家ばかりではない、ということがある。しかし、アンケート結果やプレス関係者らの反応からは、それがマイナス要素ではなく、むしろ新たな、未知の作家を知るためのショーケース的な場所として機能したことがうかがわれた。これは、大きな収穫であったと思われる。ついで、多様性を考えてみよう。たとえば、本展における写真家とアーティストの割合は7対8であり、これまでの展覧会と比較すると、きわめてバランスのよい比率である。アンケートでは、「写真展であるにも関わらず、様々な形のアートを見せてもらえて良かったと思う」といった声が寄せられ、また展評においても、「その表現の多様さから浮かび上がってくるのは、変わりつつある写真の姿であり、現在の『写真のいる場所』である」という意見が見られた²⁾。このことから、〈写真〉をめぐる解釈は、その表現方法のみならず、来館者の観覧方法においても、さまざまな変化・変容を呈しているようだ。換言すれば、写真の可能性そのものの拡大ととらえてもよいのではないだろうか。

そして、最後に国際性に関しては以下の課題を残した。

1) 国際的なパートナーシップの必要性

いかにインターネットの普及による情報化社会が進もうとも、各国・各地域固有の作家やその活動についての情報を入手するのは困難である。したがって、各国の関係機関相互の交流を深め、共同企画者や協力者として、国際的なパートナーシップを確立することが重要であると考えられる。

2) 人的交流の必要性

写真における〈現代性〉は、もはや写真だけで語り尽くせない。同様に、〈国際性〉もまた国名を列記するだけでは意味がない。作家が自らの作品について実際に語ることで、彼らの文化や歴史を映す〈鏡〉にも、新たな視点を可能にする〈窓〉にもなり得るのである。こうした意味から、展覧会予算のみならず、各国大使館や助成団体などに働きかけて、人的交流の輪を拡げていくことの重要性を痛感した。

今回の試みは、幸いにも上記の課題を概ねクリアしたうえで実施に至った。しかし、こうした問題は決して一過性のものではなく、たゆみない取り組みの継続によって解決していくべきものだ。とりわけ、2) に関しては必ずしも積極的な協力が得られる状況にないのも事実である。試みの過程で見出したいくつかの反省点をもとに、一歩ずつ、しかし確実に次なる企画展へと課題をつなげていきたい。

[註]

- 1) 『私のいる場所 ゼロ年代の写真論』日本カメラ社、2006年
- 2) 山盛英司「変わりゆく写真 浮き彫り」『朝日新聞』2006年4月6日
そのほかに主な展覧会評として以下がある。
- 3) 藤田綾子「『オフ』の素顔を拝見!!!」『産経新聞』2006年4月20日
- 4) 中原紗代子「人とモノと空間。その関係性を読み解くために写真がある」『relax』2006年3月号
- 5) Monty DiPietro, “Absolutely public: MoP shines with new photo show”, *The Japan Times*, March 15, 2006
- 6) Jeff Michael Hammond, “Private moments for public consumption”, *The Asahi Shimbun*, March 17, 2006



The Japan Times, March 15, 2006⁵⁾



The Asahi Shimbun, March 17, 2006⁶⁾

